

地域医療から見た現代医療の問題点と改善への提案

茨城県顧問（地域医療・がん対策・医療教育担当）

茨城県立中央病院 名誉院長

永井秀雄

医師になって45年、外科医としても45年になります。若い人に乞われれば今でも手術を手伝っています。当院院長在任8年間にヘルニア・胆石から肝臓・膵臓がんまで1037例、名誉院長になって3年半で310例の手術に関わりました。手術の怖さは誰よりも知っています。後悔と反省、挑戦と敗退、そしてまた挑戦を繰り返してきました。

外科医を続けてきた理由は2つです。経験を積むほど経験が生きます。その経験を伝えたいと考えてきました。義務とさえ思ってきました。もう1つは、経験のある外科医が不足していることです。とくに地方ではそれが言えます。

そもそも、なぜ私は外科医になったのか。内科の先生には不遜に聞こえるかもしれませんが、手術もできて初めてトータルな医療ができると考えたからです。学生時代から外科医になると固く決めていました。半世紀経った今でもこの考えは変わりません。内科医を見下しているわけではありません。内科医と同じようにできると思っているわけでもありません。患者さんに相対するとき、頭から足まで、表面から内面まで考えを巡らせながら、生の内臓やその病変の手触り、ときに匂いを感じとれるのは外科医でしかないと思うからです。

30歳のとき専門分野を膵臓外科と決めました。膵臓の成書の記載は不満足でした。膵がんの治療は絶望的でした。「ならば自分が」と思ったのは確かです。成果はそれなりにありました。しかし、膵がん根治手術の夢は遠のきました。病理解剖での膵がん進展様式の研究で、手術だけでほぼ100%治せるのは直径1cm以下に限られるだろうと知ったからです。早期診断の進歩、画期的な薬物治療を願うしかないと思いました。

興味は膵がんから膵炎に移り、西ドイツに留学しました。研究成果はありましたが、西洋人の生と死の考え方の違いに触れられたことも貴重でした。帰国後、母校の大学に未練はなく、職住近接の療養所外科に就職しました。永久就職のつもりでした。治す医療とは別のQOLやdeath educationの重要性に思い至りました。末端の病院に身を置くと、日本の医療の貧困さが如実に分かり、医療経済学への興味を持つようになりました。どうすれば日本の医療はよくなるのかを考えてい

たとき、母校の教授から自治医大外科への異動を勧められました。そのとき初めて「僻地医療への挺身」という自治医大建学の精神を知りました。全国から集まる医学生を自分の考えに従って教育することにより、日本の医療は絶対に良くなるという思いが生まれました。

自治医大では肝胆膵外科の新領域を開拓しながら、若い外科医の指導に当たりました。専門性と総合性を兼ね備えた外科医を育てていきました。学生教育にも一生懸命取り組みました。僻地を訪ね、地方で頑張る卒業生を励ましました。看護師、コメディカルの教育にも関わりました。救急患者は必ず受けるよう指導しました。医療安全や医療の質向上にも力を入れました。緩和ケアも推進しました。医局員は派遣に応じ、地域医療に尽くしてくれました。ところが、こうした医療提供体制の改善への取り組みが実を結ぶはずなのに、医療現場は必ずしも良くなりませんでした。むしろ悪化したという印象を受けました。

結局、医療提供体制の改善に努めても、医療を受ける患者側の体制、すなわち受療体制への取り組みが従来おろそかになっていたことに気づきました。医療費抑制、医師不足、少子高齢化社会の中であって医療提供体制をどのように工夫してみても、一般国民・市民への医療教育なくして医療は決して良くならないと考えるようになりました。鍵は、義務教育への医療学導入だと思いました。

自分が肺がんの診断で手術を受け、結果的に違っていたことがきっかけとなって大学を辞め、茨城県に転任しました。県立病院の院長として病院機能と経営の改善を図りつつ、児童・生徒・県民への医療教育・がん教育に努めました。市民が正しい医療知識を持って医療に積極的に参画することを意味する「参療」の考えを県のがん条例に含めるよう働きかけしました。こうした取り組みの成果はまだよく分かりません。しかし、県民の参療意識、「自分の命は自分で守る」意識の醸成に微力ながらお手伝いできているのではないかと考えています。

その一方で、医療提供体制にもなお問題が残されていることをあらためて考えるようになりました。極端な医師不足に見舞われている茨城県から眺めると、医療提供体制の様々な問題が新たな視点で見えてきました。医師不足、医師の質、外科医の働き方、女性医師の働き方、医療連携、医療事故調査制度、少子・超高齢化などについて思索を巡らす機会が多くありました。そして、こう考えたほうがよい、こうすればよいのではないかと、思うようになりました。

本講演では、こうしたことにも触れながら私見を述べたいと思います。